

The brown birds from windy hill “ブラウンバース・フロム・ウィンディーヒル” “three sails to the wind”

- 1 bad end to lies
- 2 dragqueens from darlinghurst
- 3 valley below
- 4 desret song
- 5 hope
- 6 sou'wester 1
- 7 space in the day
- 8 man we'll soon forget
- 9 three sails to the wind
- 10 ongoing massacre
- 11 visions of true
- 12 mr squidlip look lively now



「ニール・ヤングがサーファーだったら」

2007年 オーストラリア東海岸パイロンでレコーディングされ南オーストラリア・アデレードでミキシング、マスタリングされた本作は、アンドリュー・キッドマンとニール・パーチェス・ジュニア(NPJ)の2人のサーファーが創り上げた21世紀現在のリアル・サーファーズ・サウンドである。アンドリュー・キッドマンは1997年「リトマス」、2003年「グラスラブ」の2本のフィルムをリリースしているが、「リトマス」はビデオ発売される前にサウンドトラック・アルバムが出来ていた。「グラスラブ」もしかし、アンドリューはフィルムと平行してサウンド制作に撮影と同じ、時にそれ以上に精力を注いでいる。さらにこの間にソロアルバム「スペース・イン・ピイトウィーン」をリリースしている。またミック・ウォータースと共同でニューフィルム「ビリーブ」と「ホットバタード・ソウル」を制作したが「ホットバタード・ソウル」では全編サウンドトラックを担当した。



バンド名は直訳すると「風が舞う丘の茶色の鳥達」、風の舞う丘はパイロンの山々で、海岸線沿いの観光地と化したパイロンベイの町とは異なる静かな場所である。ディック・ホール、デビッド・サンプターといった巨匠から近年では多くのサーフ系アーティスト、ジェームス・マクミラン、ミック・ウォータース、ボウ・ヤング等も移住している。鳥達はバンドのメンバーである。バンドマスター、アンドリューは子供時代からニール・ヤングとボブ・ディランを好み彼自身の音楽創りのルーツでもある。本作のリリースに合わせてパイロンベイのグレートノーザンホテルを皮切りにツアーが始まったがタイトルはズバリ「ニール・ヤングがサーファーだったら」ライブでニール・ヤングのカバーが演奏されるわけではない。シニカルな歌詞、ヘビーなギター、フロウなフォークギター。バンドのメンバーはヴァル・ダスティエー・エクスペリメントのオリジナルメンバーにNPJが加わったギターサウンドズである。ニール・ヤングを髣髴させるロックとフォークが交錯するサウンドは70年代風でもあるが、新鮮でもある。



Question — 最初の作品「リトマス」から 10 年、あの頃から自分で演奏して歌いサウンドトラックを制作しているね。音楽へのこだわりは人一倍強いようだが、サーフィンフィルムと音楽にはどんな関係があるのか？

アンドリュー・キッドマン — 自分が制作するフィルムのために自分自身で音楽を創るのは楽しいよ。理由は編集する時に音と映像の両方を完全に把握することが可能になる。その結果、繋ぎ目のないものが出来上がる。考えながら見ることなしにね。NALU—大部分のフィルムメーカーは音楽が大切だと知りつつもそこまではしない。なぜそんなに音楽に熱心なの？自分がそうしたからさ。曲を書くことで自分の考えをはっきりさせることが出来る。音楽を言葉の感情を呼び覚ます。音楽に最大限の労力を今後も注ぐつもりだ。でもバンドを持ち他のミュージシャンとやることはフルタイムジョブが必要とされる。いつも友達に無償だけれど一緒に演奏することを頼むわけにはいかない。誰もが家族を養わなければいけないし制限がある。だからこそ一緒に演奏することはいつだって最高に楽しい。もっとやりたいね。

Question — そもそもサーフィンミュージックとは？

アンドリュー・キッドマン — サーファーが海や日常を音で具象化するアート、つまりサーファーがサーファーのために創造する音楽である。

By Tadashi Yaguchi